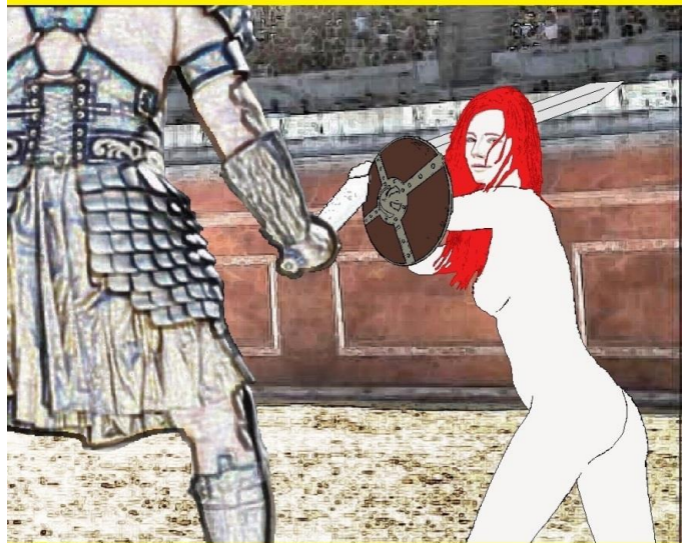


# ミスリルの虚妄

～繁殖寵姫の権謀術数



*Presented by*

*Horikado Nagayasu*

目次

粗筋：『ミスリルの悲劇』 .....	- 3 -
1. 屈辱の行軍 .....	- 5 -
2. 恥辱の寵姫 .....	- 8 -
3. 正妃の嫉妬 .....	- 41 -
4. 御前試合	
5. 最初の手駒	
後書き	

## 粗筋：『ミスリルの悲劇』

ミスリル銀の伝説に護られたレナール公国に、侵略王が襲いかかる。

レナール公は暗殺され、第一王女にしてミスリル処女騎士団長のリゼットは捕らえられた。圧倒的な軍勢を前にレナール公国は降伏し、王妃と妹姫も囚われの身となった。

侵略王の狙いはミスリル銀だった。それが実際に存在し、製法さえ歴史書に記されていると知るのはリゼットひとり。自分にではなく妹への拷問に屈して、リゼットはすべてを白状する。

王妃は傀儡に仕立られ、妹姫は捕虜の忠誠を試す道具として慰安婦に墮とされる。

そしてリゼットは、未来のレナール国主を孕ませられるために、処女のまま（しかし後門はさんざんに凌辱されって快樂をも教え込まれて後）敵国へ連行される。敵国の王太子と娶され、将来のレナール公国の傀儡となる男児を産まされるために。

ミスリス銀の武器防具をまとった親衛騎士

団の先頭に引き据えられて全裸で、しかしレナール公国第一王女の、ミスリル騎士団長の、矜持を胸に秘めて堂々とリゼットは歩むのだった。

## 1. 屈辱の行軍

ざっしゅ、ざっしゅ、ざっしゅ……石畳の街道を踏みしめて、クローブ王国軍団の凱行が延々と続く。

リゼットは軍団の中ほどを、国王グスタフの馬鞍につながれた鎖に引かれて、おのれの意思とは関係なく歩を運ばされていた。歩みが遅ければ前へ引っ張られて、首枷の重みでつんのめりそうになる。

いっそのこと、このまま倒れ込んで、グスタフがどうするか試してやりたいとも思ったが、実行に移す勇氣はなかった。そのまま石畳の上を引きずられて傷だらけになって……おそらく自分は、苦痛から逃れるために立ち上がってしまうだろう。石畳に皮膚をこそぎ取られて血まみれになって死ぬ勇氣は、今の自分にはないと、リゼットにはわかっていた。

街道の両側に居並ぶ民衆の目に惨めな姿を晒しながら、クローブ国王グスタフ・シュリックに鎖を引かれるまま、自分を犯す男にまみえるために歩み続けるのだった。

——大休止で兵たちが昼食を摂ったときも、リゼットは街道脇の樹につながれて。グスタフみずからが口に含んだ水をちょうだいする光栄に浴する屈辱に甘んじなければならなかった。それは、リゼットにとっては初の接吻でもあった。

「三つのうち二つの穴までは、わしが初物をいただいたことになるな」

そんな揶揄にも耐えたりゼットだが、どうしても耐えられない状況に直面したのは夕暮れが迫ってからだだった。

「お願いします。道沿いの草叢でもけっこうですから……ほんのひとときだけ、憩わせてください」

リゼットとしては、恥を忍んであけすけに生理的欲求を訴えたつもりだった。

しかしグスタフの答えは、さらに直截で無慈悲だった。

「虜囚の身で我儘を言うな。軍馬でさえも糞小便を垂れ流して行軍しとるわ」

(……………！)

リゼットは反射的にグスタフを睨みつけ、そこからは気力を振り絞って視線をそらさな

いでいたが——グスタフになんらかの感銘を与えた様子はなかった。グスタフは前に向きなおって駒を進め、不意に左手で鎖を手繰り寄せて、リゼットに小さな悲鳴をあげさせた。

一日の行軍が終わって宿営の準備が整っても首枷はそのままで、樹につながれたリゼットが、兵士にからかわれながら小水を逆らせたのは、無理強いに摂らされた夕食の直後だった。地面に座ることを許されていたのが、せめてもの慰めだったか、どうか。動ける範囲はごく限られていたので、リゼットは湿った地面の上で夜を過ごさねばならなかった。

こらえていた大きいほうも、三日目の昼には限界に達した。

クローブ王国の首都に連行されるあいだじゅう、リゼットは屈辱を重ねさせられたのだった。

## 2. 恥辱の寵姫

母は主だった貴族たちに毎夜のごとく夜這いを掛けさせられ、妹は文字通り毎晩（月の障りのときさえも）幼い肉体をむしろ悦んで傭兵どもに貪らせているという事実を、リゼットは知らない。もし知っていれば、自分の待遇があまりに恵まれ過ぎていることに罪の意識を持ったことだろう。

首都に帰還したグスタフの一行は、街道の両側に群れた万余の民衆、城壁に立つ二百の兵士、立錐の余地がないほどに大広場を埋め尽くした二千を超える国民の歓呼を浴びながら――偽りのミスリル銀の剣を押し立て、裸の公女を歩かせ、美女たちを護送馬車で引き回して宮殿へはいった。

リゼットは十四人の娘たちとひとまとめに、宮殿の奥深くにある地下牢へ入れられた。十四人はまったくの素裸だが、リゼットだけは依然として首枷を付けられていた。

「失礼いたします……」

騎士のひとりがリゼットの首枷を調べて



「鉤で留め合せてあるだけです。はずせませす」  
「ありがとう。でも、このままにしておきます」

「でも……」

「勝手なことをすれば、あなたもわたくしも罰せられるでしょう」

「鞭だろうと晒しものだろうと、そんなものは恐れませせん」

「わたくしは恐れるわ」

リゼットは怯えた口調でミレーユをさえぎった。

「乳房を鞭打たれる痛みを、あなたは知らないのよ。尖った楔が脚の間を裂き割る恐ろしさを。そして……禁忌のくぼみを、生きている丸太を突き刺される屈辱を」

ミレーユは意外だといった表情でリゼットを見て、それから後ろにさがった。

「差し出たことを申し上げてすみませんでした、姫様」

ミスリル処女騎士団員は、いついかなるときでもリゼットを『団長』と呼ぶ。いま、ミレーユの中でリゼットは、騎士に護られるべきか弱い姫君に凋落したのだ。

なんと答えていいかわからず、リゼットはかすかに頭を横に振って、それから床に座り込んだ。強行軍の疲れを一刻も早く休めたかった。半長靴を履いていたとはいえ、五日間の強行軍で、足の裏が熱を持っていた。

リゼットの前後に二人の侍女がかしずき、七人の従者がそれを取り囲み、六人の騎士たちは鉄格子に背を向けて壁を作った。今さらわずかに裸身を隠したところで意味はないが、そうするのが当然と彼女たちは考えているのだ。

リゼットは天井を見上げた。四隅に大きな金属の喇叭が吊るされている。これのある部屋では内密の話ができないと、リゼットは薄々察している。

けれど、彼女が弱音を吐いた——というのが厳しすぎるなら、真実を口にしたのは。自身への懲罰を恐れたからではない。ミレーユに罪が及ぶのを恐れた。男に犯されるくらい、ある意味、女にとってはあたりまえだ。ミリアムですら受け容れて、幼い官能さえ引き出されていた。けれど、急所への鞭打ちや三角木馬は、そして不浄の門への強姦は話が違ふ。

彼女のせいで誰かがそんな目に遭わせられるなんて、彼女が耐えられないのだった。

——狭い部屋にぎゅう詰めにして。これはこれで、長引けば一種の拷問だが。一時的な処置だろうと、リゼットは推測していた。

その推測は当たって。翌日の午後一番に、全員が裏庭に引き出された。

リゼットを除く十四人は、両手で胸と下腹部を隠している。これまでは馬に乗せられるにせよ護送馬車の檻の中にせよ、ある程度は兵士たちの死角になっていたから、恥ずかしい部位を人目に晒すことに馴らされていなかった。

裏庭には、灰色の長衣をまとった三人の男と普段着の二人の女、そして一個小隊の警備兵が待っていた。

「おめかしの前に、その臭い身体をどうにかしろ」

大きな水桶の前に立たされて、糸瓜繊維の束がそれぞれに渡された。リゼットもようやくに首枷から解き放たれて——痺れた手を懸命に動かして、下半身にこびり付いた糞便を拭った。

十五人の娘たちは、全身を濃く染めながら垢を擦り落とした。裸になって身体を洗うという行為は、けっして人に見られるどころか気取られてもいけないという羞恥心は、たとえ何週間も全裸で過ごしていようと、忘れ去られてはいなかった。

しかし。長衣の男たちの行為に異を唱える娘はいなかった。それくらいには、誰もが拷問を受け、あるいは懲らしめの鞭を心と身体に刻まれていた。

リゼットを含む十六人の娘たちはひとり残らず、長衣の男たちの手で、わずかに生えかけていた腋毛も淫毛も産毛すらも剃り落されて、首から下は剥き身の茹で卵のようにされた。それは、この時代の人間にとっては（男でも女でも）頭髪をすべて刈られるのと同じ恥辱であった。彼女たちは捕囚の身であることを、あらためて思い知らされた。

「アンヌ、セリエ、ロジーヌ、イヴ、マリエル」

名前を呼ばれた娘たちは、急ごしらえの台上で仰臥を強いられた。膝を立てて開脚した足元に、二人の女がうずくまって。小さな金

属球の串団子を股間の奥深くへ突き通して、ミリアムが受けたと同じ処置を施した。

「痛い、痛い……やめてよう……ぎゃああっ！」

「きひいいっ……裂ける、お腹の奥が裂けますっ！」

「お願い。もう二度と殿方を拒んだりしません。だから、これだけは……」

哀願もむなしく兵士たちに押さえつけられて、五人は子供を孕めない身体にされたのだった。処置を受けた当人は、ミリアムと違ってなんの説明もされなかった。けれど本能的に、自分の身に取り返しのつかないことが起きたのだと察していた。事実、この五人のうち四人までは、後に子宮内の異物を除去されたが、最初の手荒な処置で内部が傷ついており、子を宿したのはロジーヌひとりだけだった。

処置を受けた五人と、生理周期の訪れたエミリーとシルヴィアとは、股間を血で汚していた。彼女たちは二人の女の手でそこに、乾燥した蝦蟇の穂を詰めて血止めをされた。

それから、全員が一本の長い鎖につながれ

た。先頭はリゼット。腰に巻いた鎖が股間を割って、下げた後ろ手を扼す。鎖の長い長い余りが、リゼットの補佐役を務めるミレーユの腰を巻いて——列の後ろに女官の七人がまとめられた。

ふたたび宮殿へ連れ戻されて。わざわざ廊下の両側に群れをなす兵士や役人、たまたま行き合わせた女官たちの好奇と侮蔑の視線を浴びながら引き回される。リゼットだけは、あたかも騎士の正装に身を固めているかのごとく毅然と振る舞ったが、後ろの娘たちは羞恥に全身を染めてへっぴり腰で——歩みがとどこおっては股間を強く引かれ、あわてて前に追いつこうとして後ろの娘の股間に刺激を与える。

屈辱の行列の終着点は礼拝堂だった。女の姿は見当たらず。壁に沿って、身分卑しからぬと服装で知れる男たちが並んでいる。

先頭のリゼットが、司祭の前に引き据えられた。

「クローブ王国太子、ゲルト・シュリック殿」

神の代理人が厳かに呼ばわると、壁際の男たちの先頭から、筋骨逞しい青年が「ここに」

といらえて進み出てリゼットに並んだ。もみあげをたくわえただけなので印象はずいぶんと違うが、顔の下半分に髭を貼り付ければ、若き日のグスタフそっくりになるだろう。

「神の忠実なるしもべよ。汝は、この異教徒の娘を支配下に置き……」

「待ってください！」

リゼットは礼拝堂における厳粛な神の代理人の厳粛な言葉を遮るといふ暴挙に出た。異教徒と呼ばれるのは、自分は人間ではないと宣告されるのと同じことだった。淫売婦とよばれるより売国奴と呼ばれるより、はるかに屈辱的だった。

「わたくしは、神の忠実なしもべです。レナール教区に問い合わせてください。受洗の記録が残っているはずです」

「その必要を認めぬ」

司祭は取り合わなかった。

「恥部を隠すために神から与えられた毛を剃り落とし、あまつさえ素裸で人前に立っているのが、異教徒の証拠ではないか」

「これは無理強いに……」

「余の言葉をうたぐる信者は、ここにおる

か？」

「いいえ」

居並んだ男たちと警備の兵士が唱和した。

「な……！？」

絶句したりゼットの頭を、絶望と憤怒に塗  
りたくられた思考が飛び交った。

捕虜の毛を剃るとは、こういう意味を持つ  
ていたのだと悟った。自分の意志に反して剃  
毛されたのだと反駁しても証拠がない。目撃  
した兵士は何十人もいるが、だれひとり証言  
などしてくれない。

「汝、ゲルト・シュリッケは、この異教徒の  
娘を支配下に置き、教化に務めることを誓う  
か？」

儀式の流れが元に戻った。

「はい」

「教化のためには、非情の手段も神はお赦し  
になるであろう」

「承りました」

好き勝手に鬪ってよいという意味だと、リ  
ゼットは理解した。

「どうあっても本人が神の教えを受け容れぬ  
ときは、その子だけでも帰依せしめよ」



「あああっ……！」

リゼットは思わず叫んでいた。

グスタフは、レナール公国の建国にまつわる忌まわしい伝説を根拠に、教会を説得して私生児をレナール公国の継承者に仕立て上げると言っていたのだが。もっと巧妙な手段を隠し持っていたのだ。

下腹部の飾りを松脂で引き剥がされたのは恥辱の焼き印を捺すためだと、リゼットは単純に思っていたのだが、こういう企みがあったのだ。それとも、無毛の股間を目にしてから、グスタフなりベリエなりが発案したのだろうか。いや、それは今となっては詮索しても無意味だ。

この企みの肝心の部分は――神の代理人が人間とは認めぬ異教徒を孕ませても、それは不倫ではないということだ。そして異教徒の産んだ子でも、神の祝福を受ければ王太子の子として認められる。

本来なら、リゼットは怒り狂うべきだった。騎士として鍛えた武技で王太子を蹴り倒し、喉笛に膝頭を叩きこんで息の根を止めてやるべきだった。しかし、そこまでの気迫と矜持

とは――衣服と同様に、彼女から引き剥されていた。

屈服を重ねてきたリゼットだが、王太子の子を産むことだけは、まだ拒んでいる。しかし、ここまで打ちのめされて気弱になってみれば。

自分の子がレナール公国を統治するのであれば、クローブの人間が統治するよりも国民に優しく接するのではないかと思えてくる。いや、駄目だ。生まれた赤子は、それこそクローブの人間として教化されるに決まっている。

「神の祝福が御身の上にあらんことを」

逡巡のうちに、リゼットの儀式は終わっていた。

替わってミレーユが司祭の前に立たされて、黒鷲将軍の肩書で呼ばれた（リゼットは彼の顔を、恥辱の行軍のおりに何度か見た記憶があった）四十前の男が、この異教徒を強化する役目をおおせつかった。

ミスリル処女（では、とっくになくなっているが）騎士団の六人は将軍や部隊長に下げ渡され、七人の従者と二人の侍女は内政を司

る諸高官に与えられた。

主人となる男に否応もなく従わされて礼拝堂を出たりゼットたちは、そこで腰の鎖から解放されて――庭のそこここに即席の仕事場をしつらえている職人のところへ連れて行かれた。

「男まさりの公女殿下には、それにふさわしい装身具を着けていただく」

その言い方ひとつで、リゼットはおのれの支配者の性格がわかるような気がした。彼女が知っている敵方の人物になぞらえれば、父親のグスタフではなく小男のニコラ・ベリエに似ている。

彼女が最初に連れて行かれたのは、鍛冶屋のところだった。蝶番で開閉する首輪を嵌められて。大きな鉄床に首をあずける形で座らされた。

「……………！」

真っ赤に焼けた鋏を近づけられて、リゼットは息を呑んだ。

「動かねえでくださいよ。手元が狂うと、大怪我をさせちまうから」

コトンと首筋に響きを感じた。本来なら錠

前で鎖されるべき合わせ穴に鋷が差しこまれたのだ。

「せえの……」

鍛冶屋が大金槌を振り上げる。

自死はできぬまでも殺されてしまえば恥辱から解放される——と、それを神に祈り願う夜もあったが。さすがに、頭を叩き割られて死ぬ勇氣はない。

ガシイン！

後頭部すれすれに振り下ろされた大金槌が鋷を加締めて、リゼットは永久のくびきにつながれたのだった。

同じように、手首と足首にも二度とはずせぬ鉄環を嵌められた。それぞれの枷に小さな鉤が鍛接されているのに気づいて、リゼットは絶望に諦念を重ねる吐息を漏らした。鉤に鎖を引っ掛ければ瞬時に、さまざまに恥ずかしい構図、苦しい姿勢に拘束できる。

つぎに連れて行かれたのは宝石屋。太い十八金の鎖がリゼットの腰を飾った。その鎖が秘裂に食い込まされたのは言うまでもない。

リゼットが心地悪げに尻をもじつかせたのは——そこだけ、とくに鎖が太く大きくなっ

ていたからだ。つまり、排便に支障を生じない工夫が凝らされている。

金の鎖は後ろから前へまわされて、縦長の南京錠で留められている。南京錠の胴部は、金鎖の環に押し出された淫核をちょうど隠しているのだが――よほど淑やかに歩かなければ、すこしでも南京錠を揺らせば、鋭い違和感が腰を貫く仕掛になっていた。

ほかの娘たちも、さまざまな装身具や衣服を与えられていた。

首と腕をひとまとめに拘束する板枷。走って逃げられないようにする足鎖。乳房を押し上げ腰を締めて下腹部の丸みを際立たせるコルセット。胸をハート形に尻をスペード形に前をダイヤ形にえぐったお仕着せは、ちゃんとへその所がクラブになっている。

女を甚振ることに興味を持たない主人も、少数だがいた。もともと、そういう主人にいた娘たちは、穀物を入れる麻袋に穴を明けただけの着物とか短い腰巻だけとか、それはそれで惨めな姿にされていた。

それぞれに装いを凝らせられた娘たちは、主人の家へ引き取られていった。ただ首縄で

引き立てられる娘、馬につながれて速駆けを強られる娘、荷馬車に乗せられて身を縮めていれば街行く人々の好奇の視線から身を隠していただける幸運な娘、二輪車の前につながれて馬の替わりにされる不運な娘。

そしてリゼットは。群衆の目に晒されることなく、王宮の奥深くまで歩かされたただけだったから、いちばん楽な思いをさせてもらったことになる。専用の小部屋まで与えられたのだから、待遇も最上級といえるだろう。

あいかわらず金属の喇叭は仕掛けられているし窓には鉄格子が嵌められているが、床には絨毯が敷かれて、壁際は小机と椅子。日中に憩う長椅子もあった。そして、部屋の半分を占める大きな寝台——そこが、これからの、いわば仕事場になるのだと、リゼットは自嘲めいて思った。

声を掛ければ（あるいは掛けなくても）いつでも侍女が顔を出す。その、母と同年齢くらいの女性がリゼットの監視役であり告げ口鳥であることは明白だが。

時をつぶすための小道具——手芸の道具とか書物などは置かれていない。

「そういう品がほしければ、うまくおねだりすることですね」

真面目くさった顔で侍女が諭す。

そうして。妾、あるいは子を産む道具としての長い長い日々が始まったのだった。

その夜。虜囚の中でただひとり乙女であったリゼットは、ついに花を散らされた。

幽閉された居室でひとりきりの夕餉をすませ、手足と首に嵌められた枷の違和感に気分がささくられて時間を持て余していたとき。

扉が叩かれることもなく開いて侍女が廊下から恭しく告げた。

「王太子殿下のおなりです」

この国の男には珍しく髭をたくわえていない青年は、それなりに美しい顔立ちをしていた——と見えたのは、つまらぬ男に処女を奪われたくないという、リゼットの見栄だったろうか。

とりあえずリゼットは腰をかがめて、貴婦人の礼で男を迎えた。

「立て」

男が腰をかがめたのは、貞操帯と責め具を

兼ねた金鎖の南京錠をはずすためだった。

「糞と小便を洗え」

リゼットは金の鎖を持って、部屋の隅へ行った。

水瓶から手桶に水を汲んで、まず金の鎖を洗って。それから水を替えて、後ろ向きになって股間を洗った。使った水は別の甕へ捨てる。隣にある蓋付の壺とあわせて、この部屋でリゼットがいちばん気に入っている——いわば水洗便所だ。汚れを拭う布さえも用意されている。

リゼットは手招きされるままに、寝台に上がった。

「華奢な身体つきだな。騎士団長などといっ  
ていても、お飾りにしかすぎまい」

「……………」

リゼットは、すでに下着まで脱いで仰臥している王太子の隣で横座りになって、さすがに身を固くしている。まだ半勃ちのそこを視野に入れまいと、頑なに敷布を見つめていた。

この瞬間にも、目の前の男を殺す自信はある。しかし、その後のグスタフの報復が怖い。彼女ひとりのことではない。怒りのあまり、



十五人全員が処刑されるかもしれない。国に残された母と妹にも報復の牙が向けられるかもしれない。

グスタフにしてみれば、最愛の息子を失い、野望の一角を突き崩される以上の悲劇——クローブ王国の崩壊劇が幕を開けるのだ。ゲルト王太子には女も含めて子がおらず、シュリック王家の血が絶えてしまう。グスタフは兄を弑して王座を奪ったとき、弟も妹も従兄も叔父も——血族を根絶やしにしていた。もしもゲルトが死ねば、グスタフにはまだ王女が残ってはいるのだが——内々ではあるが嫁ぎ先が決まっているのだから、結果としてクローブ王国を乗っ取られてしまう。

と、そんなふうに。あれこれ理屈をつけてまで、部下や肉親の巻き添えを恐れるというのは、リゼットがすでに敵の軍門に降っている証左でもあった。

リゼットは手を引かれるままに、ゲルトの横に身を投げた。

ゲルトが身体を起こして、右手をリゼットの股間に差し入れた。

「あつっ……」

いきなり肉壺を指で穿たれて、リゼットはか弱い悲鳴をこぼした。

「あく、う……」

この娘はそこを舐られた経験がないとは、まるで気にしていない乱暴なこねくり方で、ゲルトは強行偵察を続けた。彼にしてみれば、指を一本に留めているのが、乙女への配慮だったのかもしれないが。

リゼットは、妹が母が受けた仕打ちを脳裡に甦らせて、これしきのこと、屈辱でも苦痛でもない、自分に言い聞かせた。

そして。悲しむべきは女の肉体。刺激を受けるうちに、リゼットの心は屈辱にまみれながら、身体の芯は淫らな蜜にまみれてゆくのだった。

その様子を見て――ゲルトは獲物を組み敷いた。すでに彼の股間には、父の血を受け継いで巨大な、しかも若いぶんだけ硬さで凌ぐ破城槌が屹立していた。

先端で標的を探り当てて。ゲルトは処女壁に破城槌をひといきに打ちつけた。

「んぐっ、ぎひい……」

グスタフに菊座を貫かれたときとは違った。

ぴちっと、股間が裂ける感触が最初にあつて。それから、めりめりと裂け目が押し広げられる鋭い痛み。肛門を貫かれる重く広い痛みに比べて、これは鋭く狭かった。

「ふう……」

息を吐いたのはリゼットではなく、ゲルトだった。息を止めて歯を食いしばっているリゼットを満足げに見下ろすと、一気に荒腰を使い始めた。

「ああっ、痛い……殿下、もっと優しく」

しかし願いは聞き入れられることなく――ゲルトは欲望のおもむくままに激しく腰を振って、一気に果てた。結果として、屈辱の時間は、グスタフに弄ばれたときよりはるかに短くてすんだ。それはそれで、なぜかりゼットは敗北感のようなものを味わったのだが。

ゲルトは血にまみれた逸物をリゼットの口で清掃させるような嗜虐には耽らず、水瓶の上に腰を突き出して自分で清めると、身づくろいをして、そそくさと部屋を出て行った。リゼットがなにがしかのおねだりをする（つもりなど、ないけれど）暇もない、あわただしい交合だった。

——女になった感慨もなく、ひたすらに惨めな気分で寝台に横たわって悶々とするうちに夜も更けて。

かすかな軋み音とともに扉が開いて、大きな人影が部屋にはいつてきた。

「あいつのことだ。さぞ物足りない思いをしたただろうな」

声を聞くまでもなく、リゼットにはわかっていた。クローブ国王グスタフだ。

「こんな夜更けに、なんのご用ですか？」

「物足りない思いを埋めてやろうと思ってな」

彼こそ異教徒。いや、異端者だとリゼットは決めつけた。

ちなみに。異教徒は神の教えを知らぬ野蛮な生き物ではあるが、改宗させて正しい道に導くこともできる。異端者は神の教えを知らながら、それをねじ曲げている人間であり、もはや救いようがない。したがって、ただちに殺されるべき『敵』である。後の世界で新教と旧教との、血で血を洗う戦いが繰り返される真因は、そこにあるのだが。それはともかく。

「すでにわたくしはあなたの息子と娶せられ

た身です。なんじょうもって、あなたに身体を開けましょうや」

異端者を思いとどまらせようとして、リゼットはできるかぎり貴婦人めいた言いまわしを使った。

「勘違いをするな」

寝台からおりて身構えたリゼットを、グスタフは苦もなく部屋の隅へ追い詰めた。体格でいえばゲルトのほうがまさっている——とは言わないにしても、若さで優位に立っている。しかし全身に漂う迫力は、父が圧倒していた。彼を殺すどころか、素手の相手に剣で向かっても勝てる気がしなかった。

「わしが慰めてやるのは、あいつが手をつけなかった場所だ」

リゼットは震えあがった。忌まわしい行為とそれに伴う凄まじい痛みを繰り返されるくらいなら、父と子のふたりに女の部分を犯されて、どちらの種とも分からぬ子を孕んでもかまわないとさえ思ってしまった。

「いや……」

壁に背中を押しつけて、じりじりと右へ逃げるリゼットだったが、グスタフの太い腕に

行く手を遮られた。

「怖がるな。今度は優しくしてやる。おまえの妹が味わった快樂を、おまえにも教えてやる。いや……」

グスタフは左腕でリゼットの肩をつかんで壁から引き剥し、両腕で抱きあげた。

「後ろのほうが快樂は深いというぞ……すくなくとも、男の精を吐き出す何十倍も凄いのは事実だ」

経験したかのように自信たっぷりと断言する。グスタフがかつては美少年だったなどとリゼットには想像できないし、たとえ肖像画を見せられたとしても、その少年が同性の腕に抱かれたことがあるかもしれないとは、さらに想像の埒外だった。そもそも、男も同じ器官を有しているという当然の事実さえ、リゼットは気づいていなかった。

リゼットは寝台にそっと寝かされて。鎖の貞操帯をはずされた。彼が合鍵を持っているという事実は、息子が父に後門の権利を認めたとことを意味している。

「そう怯えるな。もっとくつろげ」

グスタフは上着の隠しから小瓶を取り出し

て、中身を口に含んだ。唇の端から垂れた滴は毒々しい赤色をしている。

グスタフの髭面が真上から迫ってきた。

「……………」

リゼットは、耐えがたい渴きを癒すためだけに。この男に口づけを許している。しかし今は——口移しに酒を呑ませようとしているのだが、それを呑まされた母と妹がどうなったか……リゼットは顔をそむけた。しかし。母は張形で二穴を同時に貫かれてさえ喜悅の叫びをあげ、妹は乙女の身にもかかわらず、愛撫に身悶え、みずから散華を求めた。

(母様、ミリアム……わたくしも、同じ地獄へ堕ちましょう)

リゼットは顔を戻した。

口のまわりを髭にくすぐられて、それから唇と唇が触れ合った。生温かい液体が流し込まれる。リゼットは息を止めて、それでもすこしむせながら、媚薬（と信じ込まされている酒）をひといきに呑みくだした。

(呑んだ。呑んでしまった。もうすぐ……)

酔いがまわるより早く、自己暗示がリゼットの心臓を早鐘のように拍たせた。

「ほう……目がとろんとしてきたぞ」

言葉に追い打ちをかけられて——リゼットは腰のあたりが熱くなってきた。肉壺の奥に蜜がにじむのを感じた。

ただ見つめられているだけで、乳首が隆起して硬くしこってくる。その乳首に、グスタフの指が触れて。風のように撫でて通り過ぎた。

「あ……んっ」

くすぐったさを伴ったさざ波が乳首から乳房に広がって、そこで消えた。もっと強くさざ波を立ててほしいと、リゼットはもどかしさを感じた。

それに応えるように。戻ってきた指が乳首の上で止まって、ちょんちょんとつついた。

「あう……」

はっきりと心地良かった。乳房を掬うように触れられて、さざ波が乳房全体に反響した。

グスタフはリゼットに馬乗りになったが、膝で腰を浮かして、体重をまったく掛けなかった。そうして、両手でやわやわと乳房を揉んだ。

「あ……そんなにされると……」



腰の奥が疼いて熱い蜜が迸る——とは、口に出せない。

それにしても。この人は、こんなにも優しく女体を扱えるのかと、リゼットは信じられない思いだった。乳房をわしづかみにしてこねくりまわしたのが同一人物だとは、まして乳首に針を突き刺したのがこの人だとは、信じられなかった。

「あ、はふうう……ん」

慎みも敵愾心も媚薬に押し流されたという自己暗示が、酒の酔いが、リゼットの官能を煽った。そして彼女の身体は、妹よりも熟している分だけ、官能も深かった。

こんな遠慮がちな愛撫では物足りないと言え、思ってしまった。

リゼットの初心な表情の変化を経験豊富なグスタフが読み取って。彼の両手は乳房をはなれて腋から腰を撫で下ろし、ミリアムにしたのと同じ手管で太腿を執拗に愛撫した。

内腿をくすぐられているうちに、自然と脚が開いてくる。

グスタフは鼠蹊部を逆撫でし、大淫唇を撫で下ろし、親指の腹で小指の先で淫核に羽毛

のような刺激を与えた。

「あっ……あんっ……くうう」

鞍に密着した裸の股間に妖しい疼きを覚えたことは、ある。股間を割る鎖に疼き搾り出されたことも、ある。けれど……このような純粋な快感は、生まれて初めて経験するものだった。こんな快感が与えられるからこそ、女は恥ずかしい姿態で男に組み敷かれ、犯され孕まされ子を産む苦しみにも耐えるのだと——リゼットは漠然と感じていた。

しかし、それはまったく間違っていた。リゼットの快感は、オリティアが二穴を貫かれたときの百分の一にも、まだ達していなかった。

すでにリゼットの股間は粘っこい蜜にまみれて、敷布に大きな染みを作っていた。

グスタフはリゼットの脚を抱え上げて、膝を両肩に担いだ。

「あ……恥ずかしい！」

大きく割り開かれた股間を見下ろされて、リゼットは両手で顔をおおった。

ぐちゅ、ずぶ……まだ破瓜の出血が完全には止まっていないそこを、グスタフの指がか

きまわした。

痛みは、ほとんど感じなかった。感じたとしても、それをうわまわる快感があった。リゼットは、その快感に――没入できなかった。まだまだ物足りなかった。

「きゃ……」

ぬらっとした感触を後門に受けて、グスタフがどこを使おうとしているのかを思い出した。

「お願い、そこは……」

両手でグスタフの腕をつかんだ。しかしグスタフは、それを振りほどこうともせず指を動かし続ける。

「優しくしてやると約束したぞ。わしに任せておけ」

どれだけ憎んでもあまりあるはずの男の言葉に、リゼットはなぜか安堵を覚えた。

「このぶんでは香油は要らぬな」

肉壺から掬い取られた蜜が、菊座に塗り込められていく。グスタフは、ただ塗りつけるだけでなく、薄紫色の皺に囲まれた穴を丹念に揉みほぐした。

「あ……？」

指を挿入されても、リゼットは痛みを感じなかった。排泄器官を騷られているという思いが、リゼットの頭を痺れさせた。菊座への刺激が伝わって、肉壺はいっそうの蜜をあふれさせた。

ぐっと膝が持ち上げられて、腰が宙に浮いた。

(挿れられる……)

思わず、リゼットは筋肉をこわばらせた。その中心に正面から、温かく柔らかい感触を押しつけられて。

「こわがるな。こつは覚えているはずだぞ。力を抜いて、ゆっくり息を吐け」

言われたとおりに息を吐いて、大きく吸って。

「はああああ……ふう」

ぐうっと菊座を圧迫されて、それから貫かれる——焼けた鉄棒を押し込まれるような激痛は、一瞬だけだった。内臓を押し上げられる重たい痛みも、耐えられないほどではなかった。菊座は剛直をそんなに強く押し返しはせず、するりと迎え挿れたのだ。

「はああ……ああっ！」

リゼットの声が高くなったのは、肉棒を支える必要のなくなったグスタフの右手が、淫核の攻略に本腰を入れたからだった。

人差し指と中指の背で実核をほじくり出して、親指の腹で転がす。

「ひぎっ……ひいいい！」

苦痛ではなく、快感に耐えきれない悲鳴。

菊座の引き攣れるような痛みと、剥き出しにされた実核から搾り出された純粹の快感とが、腰の奥でひとつになった。

グスタフは、快感を知り初めた少女の反応をたしかめながら、ゆっくりと抽挿を開始した。肉棒の動きに合わせて、実核への刺激も怠らない。深く突き挿れながら実核を柔らかく押しつぶし、肉蕾をつまむ二本の指を細かく震わせる。

リゼットは無毛だが、グスタフの股間は顔と同じくらい剛毛が密生している。その一本一本の毛先が、リゼットのもっとも敏感な粘膜をくすぐる。リゼットの息づかいが徐々にせわしなくなっていく、それに答えるようにグスタフの腰の動きも早くなっていく。そうして、ついに……

「やめて！ もうやめて……身体が破裂しちゃう！」

リゼットは寝台に両手を突っ張って、宙に持ち上げられている腰を、さらに高く突き出した。びくんびくんと全身で跳ねて、そのまま動かなくなった。

グスタフは、最後まで優しかった。絶頂のうえに絶頂を重ねさせる——女にとって極楽でもあり地獄でもある局面まで追い込もうとはせず、そっとリゼットを寝台に仰臥させたのだった。

もつとも。搔き出された糞便で汚れた股間を洗ってやらず、そのまま金鎖で股間を封じるくらいには無慈悲であったのだが。

そのように、王太子ゲルト・シュリックの父親は加虐にせよ愛撫にせよ、女を哭かせることに悦びを見出す男だったが、息子のほうはいたって淡泊だった。いや、最初の一か月は日を空けずにリゼットの部屋を訪れたのだから、精力的ではあった。しかし、彼はおのれの欲望を吐き出せばそれで満足する男だった。征服欲に乏しかった。

いつかりゼットは、せいぜい週に一度のグスタフの夜這いを心待ちにするようになっていた。肉壺での深い悦びを知ることなく、肉蕾の先鋭な快感にのたうちながら菊座を開発されていった。

一国の公女としてはあまりに屈辱的だが、ひとりの女としてはむしろ幸せだったかもしれない日々は、唐突に終わりを告げた。彼女の妊娠が確定したからだった。

万一にも子を流さぬようにと、リゼットの夜は退屈なものになった。

このまま子を産むべきなのだろうか。すでに芽生えた母としての本能は、そんな疑問を寄せ付けない。しかし公女としての論理的な思考は、母体を傷つけるという犠牲を払ってでも、レナール公国第一公女とクローブ国太子との間に芽生えた命を屠るべしと、強固に主張している。

かりにリゼットが神の摂理に背いて、罪のない命を流し去ったところで。二度三度と妊娠は繰り返されるだろう。そのどこかで自分は母性に負けてしまうだろうと、彼女はすでに悟っている。

リゼットはつわりに悩まされながら、一向に心が定まらない。まだその時期ではないとわかってはいても、お腹がちっとも膨らまないのは、赤子が母親の迷いに気兼ねしているからではないかとさえ思うのだった。



### 3. 正妃の嫉妬

旧レナール公国とクローブ王国との間にはいくつかの小国と、国家とはいえないがそれなりの武力を保持する城塞都市も点在している。リゼットの妊娠が定まったのを見届けて、グスタフはその攻略に乗り出した。おそらく、ミスリルを装備した近衛騎士団と破城槌とが城壁の前に立つだけで、城塞都市は門を開くだろう。

霸王の不在を衝いたのか、ただ偶然が重なったのか。これまでにない蛮族の大集団が北辺の国境に押し寄せて、留守を護っていた王太子も出撃せざるを得なくなった。

主人が不在とあっては、宮廷内の規律も自然と弛む。

外側からの鍵がはずされる音につづいて扉が軽く叩かれて。リゼットがいらえるより先に侍女が顔を覗かせた。昼の侍女としては三人目の女だが、リゼットには誰も同じにしか見えない。

「王太子妃パメラ様のお微行です」

「……どうぞ、おはいりください」

戸惑いながらも、リゼットはこの場で許されるただひとつの返事をしてひざまずいた。

リゼットは王家の女性に面識はない。部屋から出ることも滅多に許されぬ身で接することができるのは、自分の所有者である男と、その父親。そして一日二交替で月毎に入れ替わる侍女兼見張の女。週に一度は体毛を剃りに訪れる、灰色の長衣に身を包んだ――床屋であり外科医でもある男。あとは、掃除やら尿瓶の交換に訪れる名もなき下女たち。

それでも、あれこれの噂が風に乗って届くこともある。

王太子妃パメラ・ボゾン・シュリック。実家の姓を麗々しく残して、彼女は強大国の第二王女だったことを鼻に掛けている。24歳というから、まさにこれからが女の盛りなのに、夫の寵愛が冷めかけているとも聞いた。

「素裸を晒して恥ずかしがりもせぬとは、呆れはてたものじゃ」

パメラは扇子を広げて、穢れを払うように煽いだ。彼女とて、リゼットが全裸を強制されて体毛も無理に剃り落とされていることを

知っている。しかし、そんな目に遭わされながら平然と振る舞っているリゼットの心が理解できないのだろう。

「よほど恥知らずに夫を誘惑したものと見える。ふた月とせぬうちに孕みおって。わらわなぞ、もう四年も経つというのに……」

恋愛経験のないリゼットにも、王太子妃の言葉が嫉妬から発しているくらいはわかる。

「が、腹に宿った王太子殿下の御子に罪はない。見目麗しく丈夫な男の子を産んでたもれ」

男たちの政略をまっとうさせるために嫉妬の感情を抑えているのだとしたら——リゼットの中で、わずかに同情の念が動いた。

「健やかな子を産むには、部屋に閉じこもらず陽の光を浴びさわやかな風を吸い、身体を動かしたほうが良い。わらわが遠乗りに連れ出してやろう」

なにかが心に引っ掛かった。リゼットは思わず顔をあげたが、パメラの敵意を隠そうともしない視線を浴びて、元の姿勢に戻った。

「ありがたく存じますが……わたくしは、王太子殿下に支配される身。勝手な振る舞いはできません」

「王太子殿下がご不在のおりは、妻であるわらわが財産を管理するのじゃ。わらわの命令は王太子殿下の命令であるぞ。立って、ついて来よ」

言うだけ言うとパメラは、こんな部屋に留まるのは身の穢れとばかりに廊下へ出た。

リゼットは、そのまま王太子妃が立ち去るのを待つ——ことは、できなかった。三人の兵士が踏み込んできて、強引にリゼットを立たせた。

いっそ、とことん強情を張って、鎖で縛られて引き立てられたほうが、屈辱ではあっても誇りは失わないでいられる。そうも考えたが、パメラがなにを企んでいるかはっきりしないうちに、求めて行動の自由を奪われる愚は避けるべきだと判断した。

「手をはなしてください。ひとりで歩けます」

リゼットは強い力で兵士の手を振り払うと、大股にパメラの後を追った。妊娠が判明してからは、鎖の貞操帯はリゼットの股間から取り去られていた。女騎士の歩みで歩いても、股間を妖しく刺激されることはなかった。

細い廊下を何度も折れて——幽閉されたと

きにとおった大廊下を、リゼットは出口に向かって歩いて歩いた。

先頭に行くのは二名の護衛兵。パメラとお付きの侍女三名が続き、その後ろに、監視の兵に前後左右を挟まれたリゼット。総勢十一名の行列だった。

一行に出会った人々は、王太子妃に向かって恭しく礼をして、リゼットが通りかかると顔をそむける。リゼットは忌み嫌われる異教徒ということになっているし、事実上の妾である若い娘の裸身を凝視したりすれば、王太子の不興を買うかもしれない。

引き出された庭には、四人乗りの無蓋馬車と五頭の馬が待っていた。パメラは侍女を率いて馬車に乗り込み、先頭の兵二名が御者台に位置を占めた。

リゼットには騎馬が与えられた。五頭のうちで群を抜いた悍馬だとひと目で知れた。

(そういうことなのか……)

かつての女騎士に戻って、リゼットは男言葉で考えた。つわりが軽くなるまでが、もっとも流産の危険が大きいという。一日働かねば一日の糧を失う洗濯女や下層農民でも、こ

の時期は家にこもる。

そんなときに騎乗すれば、しかも馭しにくい暴れ馬をあてがわれれば——いや、切り抜けてみせる。と、リゼットは決意した。

子を故意に流してしまおうという考えは、まだ捨てていない。罪深い行ないをみずからはせずに子が流れてくれれば、それを運命として受け容れる——のは、戦うすべを知らぬか弱い女だけだ。自分は違う。ミスリル処女騎士団長たる者、運命に屈しはしない。こんな高慢ちきな女の思惑など覆してみせる。

「この子の名は、なんというのです？」

二人がかりで悍馬を押さえている馬丁にたずねた。

「ん……？ この馬か。名前なんか、ねえよ」

誰も乗り手がいないと白状したも同じだった。

「かわいそうに。では、わたくしが名前をつけてあげます。そうね……フードラ。おまえは稲妻よ」

リゼットは手綱を受け取った。

とたんに馬は後ろを向いてリゼットを蹴ろうとして、手綱で引き戻されると頭を下げて

噛みつこうとした。

「こら！」

厳しい声で叱りながら、リゼットは馬の鼻面を指で強く弾いた。棒立ちになりかかるのを、横へ回って引き戻す。

馬は斜めに引かれてたたらを踏んで——どうも勝手が違うといった表情でリゼットを見た。彼女が甲冑や革服を身にまとっていなかったのがさいわいしたのかもしれない。馬は、彼女が自分を激しく鞭打ったり追い回したりする人間とは別の生き物だと考えたようだ。

「よーし、よし。いい子ね、フードラ」

動きを止めた馬の首筋を撫で、ぼさぼさのたてがみを手で梳いてやった。

馬がリゼットの顔に鼻面を擦りつけるまでに、時間はかからなかった。

「それじゃ、わたくしを乗せてね」

リゼットは鐙に片足を掛け、できるだけ小さな動作で鞍に跨った。馬を驚かせないためと、お腹の子を気にしてのことで——片脚が馬の背を跨ぎ越えるさいに股間の奥まで人目に晒すのは、致し方なかった。

「お待たせして申し訳ありません。パメラ様」

馬に（乗せられるのではなく）乗ると、たとえ裸でも心が堂々としてくる。

パメラはつんと顔をそむけて、馭者に出発を命じた。

王宮を出て、街の大通りを進む。たとえ先触れがなくても、王太子妃殿下のお通りとなれば歓呼の声が湧き起こるのであるが——馬上豊かに裸女が付き従うという異様な光景に、人びとは目を丸くし、言葉を失って見送るだけだった。

リゼットは鎧の上で踏ん張って腰を浮かし、折った膝で馬の上下動を見事に吸収していた。椅子に腰かけている以上の衝撃は、腹に与えていない。

乗馬の経験などないパメラにも、リゼットが楽々と馬を乗りこなしているのはわかった。忌々しげにリゼットを振り返って、馬車の速度を上げさせた。しかし、六人を乗せた馬車を曳く二頭の馬がどんなに頑張っても、出せる速度は知れていた。

馬車は首都を囲む巨大な城壁を出て、灌木もまばらな丘を駆け登った。



いったいどこまで行くつもりなのだろうと、リゼットは訝しんだ。侍女たちが手ぶらなのを、リゼットは抜かりなく観察していた。騎士たちの鞍にも、食料を挿れた袋は見当たらない。ぼつぼつ引き返さないと、昼食までに王宮へ戻れない。『正義の鉄槌の塔』で過ごした日々を思えば、昼食を抜くくらいリゼットは平気だが、王太子妃殿下は耐えられないのではなかろうか——などと皮肉に考えながら、さらに馬を進める。

丘をまわり込んで城塞が見えなくなり、馬車が進むのは困難なほど樹木が増えて。その陰から五、六騎が馬車とリゼットたちとを分断する形で躍り込んできた。馬に乗った男たちは平民の服装をしていたが、手に棍棒を持っている。

「くせもの！」

呼ばわってから、敵を迎え討つ武器を身に帯びていないことをリゼットは思い出した。

リゼットを囲んでいた四騎は、蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

「卑怯者！」

リゼットは襲撃者の頭上を越えて叫んだ。

「これが遠乗りの目的か！」

この場でリゼットを暗殺し、骸は狼に始末させれば――あとはパメラの人望と権謀術数の力量次第だ。王太子妃の行動を密告する者が出なければ。リゼットは見張りの隙を突いて脱走し、そのまま行方不明という筋書きになる。

悍馬とはいえ、リゼットの乗馬はろくな訓練を受けていなかった。突然の襲撃で恐慌におちいって、乗り手を鞍から降り落とした。

襲撃者が馬から飛び降りざまに、身体を起こしかけていたリゼットを押し倒した。

「へへへ……裸のお姫様よ。おとなしくすれば、いい目を見させてやるぜ」

無論、男たちはリゼットの同意を得るつもりなどない。四人がかりで手足を押さえつけ、五人目が下半身を剥き出しにしてリゼットに跨った。

「やめろ！ 狼藉者！」

「うるせえ！」

腹を殴りつけられて、リゼットは呻いた。二発、三発と拳が叩き込まれる。

「やめて……お腹は殴らないで！」

リゼットは子を護る母に戻って哀願した。  
「おとなしくします。好きなだけ騎ってください。でも、お腹だけは赦して」

リゼットは四肢から力を抜いて、睨みつけていた男から顔をそむけた。

「へへ……最初からそうしてりゃいいんだよ」

リゼットを組み敷いた男は、自分の手で肉茎をしごいて勃起させ、唾を塗りたくってから腰を一気に沈めた。

「つうう……、痛い！」

たとえ意に染まなくとも、刺激されれば股間は潤ってしまうというのに。その刺激さえ与えられぬまま、リゼットは犯された。

男は王太子と同じくらい性急に精を放出して、つぎの男と場所を替わった。

ほかの穴を使う悪癖は持ち合わせていないらしく、襲撃者は順番にリゼットを犯した。王太子しか知らなかったリゼットの肉壺は、一時間ほどのうちに六人の男に蹂躪された。

「それじゃ、仕事に掛かろうぜ」

最初にリゼットを犯した男が、棍棒を手にした。

「わたくしを殺すのね……」

叢に身を投げ出したまま、リゼットが虚ろにつぶやいた。六人もの男に犯された衝撃が——というよりは、パメラの敵意が、リゼットから反撃の気力を奪っていた。

同性に憎まれるのは、男に凌辱されるのとは違うということ、リゼットは初めて知った。男に嬲られ弄ばれるのは、自分が女として扱われているという、嬉しさとはいいすぎにしても、慰めがあった。誰が男を三角木馬に乗せて、彼の性器を痛めつけるだろう。胸や股間を鞭打って愉しむだろう。

男が男に拷問されれば、ひたすら相手を憎むに決まっている。自分を痛めつけた男の顔を懐かしく思い出さずもない。

女だって同じ——なのだけれど。相手が一方的に無慈悲なのではない。嫉妬が、そうさせているのだ。そして嫉妬の原因は、もし男に求めないのであれば、リゼットの上にあった。

「殺しゃあしねえよ、おめえはな」

言葉の意味を悟って、リゼットの絶望は深まった。

「騙したのですね。その棍棒でお腹を殴るつ

もりなのですね」

「いや——と、男は頭を振った。

「おれたちや、約束をやぶるほど悪人じゃねえ。おめえの腹は殴らねえ」

男は仲間に命じて、またリゼットを押さえつけて脚を開かせた。

「ちょっと、未来の王子様にご挨拶させてもらうぜ」

男は棍棒を逆手に握った。

ひいっと、リゼットは息を呑んだ。それから、男たちを振りほどこうともがきながら、必死に叫んだ。

「やめて、やめて！　お願い、子供だけは助けて……！　わたくしは殺されてもかまわないから！」

それは矛盾した哀願だった。母体が死ねば胎児も生きてはいない。この瞬間、リゼットは母親の本能に支配されていた。

「すぐすむから……くそ、暴れるな！」

棍棒の柄が膣に突き刺さり、奥深くまで押し込まれた。

「いやあっ……！　やめて、やめてえ！」

細い子宮口を探り当てるなど、男にはでき

ない。闇雲に膾奥を突きまくりこねくった。

「あああつ、赤ちゃんが！ わたくしの赤ちゃんが……！」

身体の奥深くでなにかが潰れるぶちっという音を聞いた——のは、リゼットの錯乱だったろうか。男が棍棒の柄を引き抜いたとき、それはどす黒い血に染まっていた。血の塊のような物がこびり付いていた。

リゼットが捜索隊に発見されたのは、午後遅くなってからだった。ただちに王宮へ運ばれて医師の手当てを受けて——流産が判明した。

王太子ゲルトの怒りは凄まじかった。

二日後に報せを受けてすぐ伝令を送り、次の日の夜にはパメラを地下牢に監禁した。そして自身も、副将に陣をまかせて急遽帰国した。

一方、国王も。こちらは諸国を鎮圧して帰途にあつたので、部隊を急がせて王太子の二日後に凱旋した。

パメラは審判の間に引き出されて——裁判ではなく弾劾を受けた。

「聖王国第二王女パメラ・ボゾン。この者をクローブ王国太子の庶子謀殺の罪で告発する」

グスタフの物言いは、暗にパメラを王太子妃と認めていない。

「わらわへのこの扱い、いかなお義父様とて承服しかねます」

投獄されて一週間にも満たないというのに、パメラは見る影もなくやつれていた。しかし、強国の王女である高慢だけは損なわれていない——いや、そこにすがっていた。

「承服せねばどうするというのだ」

「父に訴えます。いえ、訴えるまでもなく——愛娘が虜囚の身に墮とされたと聞けば、クローブ王国の全軍団をしのぐ兵力で救出に駆けつけてくれるでしょう」

「近衛騎士団百騎をうわまわる戦力とは、是非にも見てみたいな」

「控えろ、太子。この女を裁いておるのは、わしだ」

グスタフは玉座の下にひざまずかされている義理の娘を見下ろした。王族の略装に身を包んでいるが、一週間ちかく昼夜ずっと着古して汚れており、元が豪奢であるだけに、痛々

しくさえあった。

「ミスリル銀の武具を装備しておるといえど、わずか百騎では高が知れておる。すぐさまにも、あと九百の武具をそろえさせよう。金に糸目を付けねばひと月もかからぬわ」

これは、裁判の場に召集された人々、取り分けて聖王国の大使に聞かせるための言葉だった。

「つまらぬことを言い合っているのは時間の無駄だ。審問官、証人を呼べ」

最初に呼び出されたのは、ほかならぬリゼットだった。

あいも変わらず全裸で――子を宿すかも知れぬ身体に戻ったので金鎖の貞操帯を装着させられた姿で、彼女は証言台に立った。

裁判の場に召集された人々の中には、初めてリゼットの姿を見る者も何人かいる。彼らの好奇の視線、侮蔑の視線、同情の視線。

リゼットは脚色も感情も交えず、事実をありのままに証言するように努めたが、それは困難をきわめた。

「では、パメラは外出を無理強いしたのだな」

「はい」



「異議あり！ リゼット。そなたは兵士の手を振り払って、自分の足で部屋を出たのではないか？」

パメラの弁護人の反問にも、リゼットは「はい」と答えた。

肝心の襲撃の場面にいたっては、そこにパメラの意志がはたらいていたとは証言できなかった。

つぎに兵士の隊長が証言に立った。

「異教徒の娘を護らなかったのは、我らの任務は監視であり護衛ではなかったからです」

「目をはなせば逃げられるとは考えなかったのか？」

「あ……いえ。あの娘が賊に捕らわれると考えましたので」

「王太子殿下の御子を孕んだ娘を賊に奪われてもかまわぬと判断したのか？」

「……我らの第一の任務は、王太子妃殿下の護衛です。あの兵数では、異教徒の娘にまでは手がまわりません」

「そのような少数で進発したのは、隊長であるそなたの手落ちであろう」

「いえ、あの……それだけでよいと、太子妃

殿下が強く仰せでしたので」

「異議あり！　どのように仰せだったか、正確に思い出されよ」

「異議を認めぬ。兵数の決定にパメラが口出しをしたとわかれば、それでよい」

つぎに呼び出された三人の侍女たちは、パメラをかばおうとしたが、審問官の鋭い追及につぎつぎと矛盾を露呈した。

「ふと慰問を思い立ったと言うが、パメラは二日前にそなたの宿下がりを取り消したではないか」

「そなたが用事を言いつかった時刻より前に、パメラはヒルダを伴なって王宮を抜け出しておる」

「宝石箱から『青海の涙』と『樹氷の煌めき』、それと金貨十枚がなくなっている。これは、管理をおおせつかったそなたの落ち度ではないのか？」

落ち度を指摘された侍女は、それを持ちだしたのがパメラだと、事実を証言せざるを得なくなった。

「六人の賊のうち、捕らえたのは一人にすぎぬ。彼は拷問で口を利けなくなったが、その

調書はのちほど読み上げるとして。彼が隠し持っていた指輪は『青海の涙』であると、宝飾師が鑑定した」

傍聴していて、リゼットはパメラの無分別さに呆れた。

女が自由にできる財産は多くない。しかしそれにしても、出自を隠しようもない宝石を報酬に与えるとは――賊が捕まったときの用心をまるで考えていない。

兵士の数にしても、そうだ。隊長が必要と判断するだけの兵を出させればよい。どうせお微行だから、一個小隊でも大仰すぎる。その過半を馬車の護衛につければ、リゼットのまわりは手薄になる。圧倒的な多数が馬車とともに逃走したとしても、兵力を分断されたところを第二第三の待ち伏せに遭えば危険だと判断したのだと弁明できる。

なによりも、隊長の証言ぶりは、王太子妃に不満を持っているように聞こえた。

パメラは、陰謀の片棒をかつがせる男の懐柔にも失敗しているのだ。

パメラは、それほどに愚鈍なのか。それとも嫉妬に狂って冷静な判断が出来なくなって

いたのか。

証言が終わって。パメラの有罪は動かしがたい心象が、傍聴者のあいだにも固まっていた。あとは量刑であるが。

「おれは、この高慢な腹黒い女には死刑がふさわしいと思う。国家の大略を覆そうとしたのだから反逆罪で八つ裂きの刑に処すところだが……」

ゲルトはパメラを見下ろし、それから憤怒の炎を消して聖王国大使にも目を向けた。

「わずか四年とはいえ、妻であった女に慈悲を垂れてやりたい。毒酒を与えるのが穏当だと思う」

「しかし、この一件では誰も死んでおらぬ」

異教徒とされているリゼットの生死を言っているのではない。胎児は産道から出るまでは人間として認められないと、グスタフはあらためて指摘したのだ。

「人の生き死にではありません。国家の計を問題にしているのです」

「しかし、聖王国への敬意を忘れてはならぬ」

グスタフも聖王国大使に目をやった。禍い転じて福と成す。強大国に恩を売ろうと目論

んでいる。

「あんな古ぼけた、ただ大きいだけの国を恐れるとは、父上も毫碌されたか。たとえ百騎のみでも、近衛騎士団は無敵でしょう」

グスタフの苦りきった表情。

おや、とりゼットは訝しんだ。もしかすると王太子は、ミスリル銀の虚構を知らされていないのだろうか。親子は一枚岩ではないのかもしれない。巨岩のかすかなひび割れを発見した思いだった。無論、今のリゼットでは、そこに打ち込む楔にはなれないけれど。

「なるほど……レナール公が不戦を宣誓していた心が、すこしはわかってきた」

ミスリル銀がまやかしに過ぎないと知っているリゼットでさえ、その真意を量りかねる曖昧な言葉だった。

「議論は尽くされた。判決を申し渡す」

静まり返っていた裁きの場が、いっそう静かになった。

「有罪。パメラ・ボゾンに公開鞭打ち百に処する」

パメラの顔が引き攣った。有罪と断じられたことに衝撃を受け、公衆の面前で背中を剥

き出しにされて鞭打たれる恥辱に思い至って、わなわたと震えだした。

リゼットは、まずパメラに同情した。それから危惧をいだいた。

鞭打ちは、いくらでも手加減を加えられる刑罰だ。か弱い女性を大男が本気で鞭打てば、ことに背骨を打ち据えれば、百といわず十発でも打ち殺せる。あるいは、傷の手当てもいらなくらい軽く打つこともできる。

グスタフがどちらを目論んでいるのか——公開処刑である以上、そうそう茶番劇では終わらせられないだろう。パメラは殺されないまでも、十日間は寝込むくらいには鞭打たれるのではないか。

傷の痛みに呻吟しながら、パメラの怨嗟は、肌を鞭打った処刑人でもなく、判決を言い渡したグスタフにでも死刑を主張したゲルトにでもなく——この自分に向けられる。男まさりでも根本は女であれば、リゼットにはパメラの思考過程が手に取るようにわかる。

処刑後のパメラの処遇に、グスタフは言及しなかった。離婚は、神がお許しにならない。形ばかりの正妃として幽閉するのか、監視を

つけて自由に振る舞わせるのか。

いずれにしても、リゼットに恨み骨髓の女性と同じ屋根の下で暮らすことになる。

そのとき、リゼットは天啓を受けた。

「お待ちください！」

リゼットはパメラに走り寄って、その隣に立った。

「異教徒のわたくしばかりを寵愛なされた王太子殿下を、パメラ様がお恨みになるのも無理はございません。王太子殿下に刃を向けられぬからには、殿下が夢中になられている玩具を壊してしまおうと――殿方にはご理解できないでしょうが、浅墓な女は、そのように考えるものです」

自分の意志で、ここまで自分を女を貶めることに、リゼットは自虐的な悦びをさえ感じていた。

「パメラ様の胸中も察せずに、王太子殿下の寵愛を欲しいままにしていたわたくしにも罪があります。どうか、パメラ様に与える罰の半分は、わたくしにお与えください」

信じられない表情で、パメラがリゼットを振り返った。グスタフもゲルトも審問官も弁

護人も聖王国大使も――誰も彼もが、リゼットの突拍子もない申し出に驚愕している。

まず、パメラが我を取り戻した。

「差し出がましい真似をするな。おまえごときに情けを掛けられるわらわではない。おまえと並べられて鞭打たれるくらいなら、おまえと同じように素裸に剥かれてわらわひとりが晒し者にされるほうが、よほどましじゃ！」

パメラとリゼットが同じ数だけ鞭打たれるとは――二人が同格だということになる。パメラには、それがなにより屈辱だった。しかし、興奮のあまり彼女は墓穴を掘っていた。

「なるほど。リゼットの申し条にも一理ある」

グスタフが厳かに、口元には『正義の鉄槌の塔』で母子に向けてこぼした邪悪な笑みを浮かべながら言った。

「その、みずからを省みる殊勝な心がけに免じて、処罰の内容を変更する。まず、パメラは――本人の希望をかなえて、全裸で鞭を受けるものとする」

「お待ちください！ わらわは、そのようなことは……」

「控えよ！ つぎにリゼット。そなたにはか



つての騎士団長の名誉を回復する機会を与える。十名の剣闘士と戦え。負けるごとに、パメラに十発の鞭を与える」

即興で思いついたにしては、手の込んだ『見世物』だった。女騎士を裸で闘わせてみたいと――以前から妄想していたのだろう。

グスタフはリゼットに向かって皮肉たっぷりに嗤いかけた。

「姫君を護って闘うのだ。騎士冥利に尽きるであろう」